

＼18

ADULT ONLY

おなかいっぱい  
きみがほしい！！



# !!!Caution!!!

※吸血鬼のディルック×悪魔のガイア

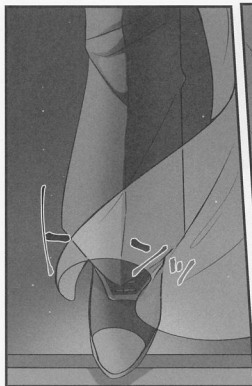
※ガイアがカントボーイ

※確執はない

ただいちゃつきまくるだけのパロディ

※何でも許せる方向け

この冊子は個人発行の二次創作同人誌で、  
公式とは一切関係ありません。  
一般の方の目に触れる行為・  
転載・複製・SNS上への無断掲載・  
ネットオークション・フリマアプリへの  
出品を禁止します。













君…淫魔のくせに、  
中々美味そうな  
血の匂いがする…



ちよつと味見  
させてもらっても  
いいかな…?

は……



最初に誘って  
きたのは君だろ

いやっ……！  
いやいやいや!?  
俺はそういうのは  
ちよつと……

というか、  
めちやくちや  
力強いなこの  
ヴァンパイア!!





ちよっつっつと  
待ったー!!!

っっっ



ひ、人の  
話を...

わあ...  
柔らかいんだな

ふんふん...



とうか...なんで  
こんなこと  
してるんだよ

お前は俺の血が  
吸いたいん  
だろ...?



ん...っ!

れう...

ちゅ  
ちゅ



ズ  
コ  
ー

……そういえば、  
君の名前を聞いて  
なかったな



フン……  
思ったとおり  
君の血は甘美だ



ガイアか……

僕はディルック  
よろしくな、  
ガイア

何がよろしく  
なんだよ……



何なんだよ  
もう……

……お、俺は  
ガイア





これを見られたくなかったのか

お前な……っ

つりん  
ん



こ……これは精気を効率的に集めるための形態で……

そういうものなのか……

そういうものなんだよ!!



もしかして  
処女か？

四ツ星!!



でも小さいし  
まだ開いて  
いないな...



っ……  
俺が相手してやって  
良いと思う奴が  
いなかったって  
だけだ!!

「コイツ淫魔のくせに  
相手選んでるよ  
絶対めんどくさい  
処女だ...って思った  
だろ今! 悪かったな!!  
めんどくさい処女の  
淫魔で!!」

お、おお...

おおお



僕はそんな君の  
お眼鏡にかなった  
っつことだろう?  
それは嬉しいな

っ……

おおお

でも……













ん……ここが  
いいのか……?



う♡やめろ  
バカっ……!

そんな綺麗な  
顔で、そんなとこ  
舐めるな……



へ？



ふぁ、嫌だっ……  
あ、う……っ♡

っ、ああ……♡

き……  
き……





ファン、その様子だと  
大丈夫そうだな…







は、っ……  
この体勢っ……  
う、あ♡

これなら君の  
一番奥に、精気を  
注いでやれるだろう？

ふん

びん  
びん

ほ  
ほ

ふん  
ふん



ふんっ、うう♡  
深っ…あ、あ♡♡

このまま中に  
出すぞっ…

きゅうっ…

ふん

ふん  
ふん  
ふん





ん...♡

しゅん...♡



っ...  
君なあ...



早く中に  
ぶちまけてくれ、  
デイルック...♡



お望み通り  
手加減は  
しないぞ...!





一步も動けない……

この程度でへばるなんてだらしがないガイアは



い……



風呂まで運んであげるよ

今日はもう体を休めるといい

お、おう……



お前が無茶したからだろこの絶倫ヴァンパイア

僕を煽ったのは君じゃないか。

否定  
てまか



はあ……仕方ないな

わっ……!?



おわれ

「よく、~~〇〇~~の〇〇してらだろ？  
自分できゃんと〇〇から♡」

「ほら、旦那様♡  
ガイアさんの  
食べて良いんだぞ？」

「(恥ずかしいに  
決まってるんだろ！)」

「君には、その、  
恥じらいという  
物が無いのか？  
(いたきました)」

いつもえっちなガイアさんをありがとうございます。  
あの時命を救って頂いた鶴です。  
ガントってわかって頂き易い一枚絵ってもうすまねえ。  
全裸しか無いよなって事でこうなりましたすみません。  
この度はお誘い下さりありがとうございます！  
ガイアさんには、ついてないです！

※ガイアが「カント」です  
※ディルックが吸血鬼、ガイアが悪魔  
※ガイアは悪魔ですが吸血行為もします

「滴る甘露、綻ぶ蕾」

◇◇◇

部屋の中を色濃い情事の気配が支配する。

膣内に埋められた指がぐるりとナカを掻きまわす。じんわりと熱いソコがディルックの指を包み込んでいく。さらにざらとした膣壁をそっと、丁寧に撫でていくと、ガイアはふるふると震えた。

「ん、く……あ、ああ……♡」

度重なる愛撫に愛液がしとどに溢れ、指に纏わりついていく。ところととしたそれは滑りをよくして、さらに奥へと指を誘っていった。

「あう……、んんっ♡」

くちゅくちゅと立つ水音がガイアの耳を犯していく。広げるように、ゆつくり丁寧に抜き差しされるそれがひどくもどかしい。もっと強い刺激が欲しい、確かな快感を。

「ん、く、う……ああ、お、んんっ♡ あ……あ……あ……」

そう思っていると、カリツと悪戯するかのようになりクリトリスを引っ掻かれた。ビリビリと脳髓が痺れるような感覚に眩暈がする。ぶつくり

と勃ったクリトリスはディルックに触れられ、歓喜に打ち震えた。ピクピクと痙攣が止まらない。真っ赤に充血したソレを弾かれるたびにガイアは脚をバタつかせた。

「ひっ……う、あ♡ ああ♡」

与えられる快感に抗うかのように首を振れば、ガイアの昏い海の底を思わせるような長い髪はバサリ、白いシートへと広がった。投げ出された股体が悶えるたびに浮き上がる。その頂で震える、ぶつくりと膨らんだ乳首は赤い果実のように美味しそうで、ディルックはばくりと食らいついた。

「んっ！ んんう……♡」

乳輪を舌で辿るようにべろりと舐めあげると、触れる前から勃ち上がって芯を持った乳首をディルックはコリコリと歯で刺激する。胎玉を味わうかのようにころころと唾内で転がすと、口いっぱいじゅくじゅくと甘さが広がっていくような気がした。

「ふん、お……っ♡ く……ん、ああ♡」

「……んっ♡」

「も、それっ……、やめっ♡」

周りの皮膚ごと乳首を吸い上げると、ガイアのナカはディルックの指を痛いくらいに締め付けた。じゅる、と音を立てて吸い上げると、ちゅぱつと放す。そうすればガイアの、ディルックの唾液を纏ってテラテラと光る乳首はぶるんと震えて存在を主張した。ああ、そういうえば反対側は放つたままだった、それでは可哀想だ。ふとそう思ったディルックは膣内を弄っているのとは反対側の指でカリカリとソコを掻いてやった。

「ひッ、んんっ、う……♡」  
ガイアの喉から細かい鳴き声のようなものが聞こえてくる。

ガイアの痴態に煽られて、ディルックの息はどんとと上がっていく。ああ、この悪魔は己を大いに恐わせる。色気がふわりとディルックを包み込んで、渴きをもたらず。早く、僕にガイアを……。

いつのまにか膣内へと挿入された指は二本、三本と増やされていた。それを開けば水音をたてながらぐばあ、と赤く腫れあがったナカを晒す。ガイアのいいところを避けるようにして解すものだから、たしかな刺激を得ることができないまま、焦れたい刺激に身体だけはガクガクと震えていた。

「挿れてほしいかい？」

ガイアの濡れた腫を覗き込むようにして聞いてやると、コクコクと小さく頷いた。身体の下に敷かれた尻尾の先が期待からばたばたと小さく揺れる。それが早く、と急かしていった猫のようでディルックは小さく笑ってしまった。もしかしたらディルックの瞳孔も開ききっているかもしれない。

急いでいるのはお互い様なのだ。

「体勢を変える。すまな。……っ♡」

ガイアの背に手を当てると勢いをつけて起こしてやる。そうして仰向けになったディルックの脚の上に跨らせると、彼の情欲に塗れた顔を見上げた。

「自分で挿れるんだ」  
「じぶ、ん……で？」

「まあ、ほら、ベッドに手をついて挿れて。このままで互いに辛いだらう？」

「そう言っちゃれば、ガイアはふるふると震えて俯いてしまった。それでもノロノロと動いてディルククに言われたとおりにしようとするのは、彼の本能が精気を求めるからなのか、それとも理性的に求めてくれてるが故なのか。それを知る術は、いまのディルククにはない。」

「なんとか腰を浮かす上がらせたガイアの膣口に、固く張りつめたディルククの性器が宛がわれる。ピクピクと脈打つソレに呼吸するかのよう。とろりと愛液が漏れでる様はなんとも淫靡だ。ちゅばっ、と亀頭を優しく覆う陰唇内はガイアの期待からか酷く熱かった。」

「ガイア？」

「いつまでも膣口に当てたまま、くばくばと閉する口でディルククの亀頭を撫でるだけのガイアにもどかしさが募っていく。もう、待ち望んだ開放は眼と鼻の先なのだ。生殺しのような状態に焦れたディルククはガイアの細い腰に手を添えると、グツと力を入れた。」

「ごちゅんっ、とディルククのモノが勢いよく挿入される。唐突にギリギリと膣内を抉った刺激にガイアは喉を仰げ反らせて絶頂した。ゆらゆらと所在なく揺れていた尻尾はピンツと張りつめ、平時は人間と変わらない下腹の淫紋は眩い光を放つ。」

「んんんんっ♡……………あ、あ、う……………」  
開かれた膣は焦点が合わず、受けた衝撃の大

きさを物語っていた。はくはくと、口は必死に酸素を取り込もうと開閉する。漏れ落ちる声は艶やかにディルククの耳を喜ばせた。

「んんん♡♡ つ、はあ……、はあ……、い、きなり……………」

「僅かな間、意識を彼方へと飛ばしていたガイアはなんとか現実へと戻ってくる。息を整えてディルククに不満をぶつけた。」

「君がいつまでもたつても挿れようとしなから」「この体勢で挿れるの、苦手なんだよ。お前が勝手に動くから……………」

「騎乗位はガイアが主導権を握れるという点において、ディルククが肩を寄せて快感に耐える表情を眺めたりできるし、氣に入り込んで挿れど氣を抜けば一氣にナカへと挿入されることもあるから、過ぎた快感に対する恐怖と常に隣合わせでもある。」

「そしていつまでガイアはディルククに負けて、勝手に挿入されてしまうのだった。」

「知ってはいたが……………すまない」  
「あ……、ほん……………つ、と、ありえ……………ない♡罰、とツ、して……………俺の、好きつ、な、よう……………に動くからな！ お、前はつ、動くな」

「はあはあ、と零れ出る息を抑えながら告げた言葉にショックです、とディルククの顔には描かれる。情けないような、曲がりなりにも貴公子と呼ばれるような人間がするような顔ではない表情を向けられ、ガイアは笑う。」

「ははっ、いい気味だ」  
「そう言う、と、ガイアはももぞと動き出す。己のイイところには当たらないよう、極力避けながらディルククの性器を搾り取ろうと動い

た。

「シートに手をついて、浅いところを使ってぐぶぐぶと扱きあげる。亀頭からエラにかけてを丁寧に締め付けて刺激していく。膣全体を使つての愛撫ではないはずなのに、それはなんともいえない興奮を生みだしてディルククの性器を奮い立たせていく。」

「おらっ♡♡ 出せよ、はやく♡♡」

「ちゅばつと膣口でキスをするように亀頭を包み込み、そうして奥へと導く。おもむろにディルククの太く長い性器に手を添えると、先ほどまでより深いところまで誘い込んだ。」

「んっ……………く、ああ♡♡、ん、はあ……、う♡♡」  
「くぶぐぶ、と小さく音が鳴る。ゆつくりではあるが、ガイアの最奥まで呼び込まれた氣がある。」

「お、れの、ナカ♡♡ いいだ、ろ？ ほら、はやく、あ、だせっ♡♡」

「ゆきゆきと腰を揺さぶり、搾り取るように膣内を縮める。降りてきた子宮の入り口と亀頭がちゅつと触れ合った。」  
「もう、我慢の限界だった。」

「ディルククは腹筋に力を入れて起き上がる。ガイアの腰と尻に手を添えた。そうして彼を持ち上げると、いままでも焦らされたお返しとばかりに最奥へと自身を叩き込んだ。」

「ひっ……！ 俺が、う、ぐ、っ、て、んんん♡♡、ああ♡♡ 言った、のに……………いっ♡♡」

「ガイアが避けるようにしていたGスポットもお構いなしに擦り上げていく感覚に視界がパチパチと明滅する。」

「君が焦らすような真似をするから。君が好き

なように動く様を見てるのも楽しいけど、もう僕も限界だ」

ギリギリまで抜かれた性器がどちゆりと最奥まで穿たれる。

「は、っ、うっ♡ ぶんツ♡ ……っ、あ？ ツお、はい、ってッあああああ〜♡♡♡」

ずぶぶぶ、と勢いよく抉られる感覚に背筋がゾクゾクと戦慄く。背中がぐっつと沿ってしまった。

膣内ものをぎゅゅと締め付けてしまった。

「くる、しっ♡ おな、か、んんう〜♡♡♡」

「ガイア、締め付けすぎだ」

「んあ……な、んて… あ、う……んん〜、あ♡」

散々焦らされたディルツクの限界はもう目印だった。

「ガイア、すまない。ナカに出す」

「いい、かま、わないつ、からあ♡ ナカ、だせっ！」

その言葉待っていた、とばかりにガイアの細い腰を掴んだディルツクはずるずると性器を限界まで引き抜くと、どちゆんっ！と激しく叩き込んだ。

「……っ、びっああああああああッ〜♡♡♡」

どんっ、と形容しがたい快感がガイアに流れ込む。視界は白に染まり、身体がピクピクと痙攣していた。ああ、いったんだな、とどこか冷静な部分で思っていたら、子宮がぶわっつと満たされる感覚がした。

「……っ」

ディルツクがガイアの子宮内に射精していた。定まらない視線でそっと彼を見ると、目を瞑って耐える表情に心臓がどくどくと高鳴った。

絶頂の余韻で意識が朦朧としていたガイアが突然、ディルツクの首に手をまわす。そうして彼を引き寄せると、晒された白い項へ牙を突き立てた。

「……っ！」

ぐっ、と念入りに牙を立て、そしてゆっくりと引き抜くと、ディルツクの首筋から鮮血がとろとろと溢れだす。爛々と輝く腫でそれを見たガイアはべろりと唇を一舐め、それにしゃぶりついた。じゅる、じゅるりと吸い付き吸り上げる音が響く。

「ん、くう……、んくっ、んん……ふう、ん……」

ディルツクの血を体内に取り込むほどに、ガイアは徐々に、とろりと恍惚とした表情へと変わっていく。先に身体を重ねてしまい、胎内に精気を存分に受けたためか、随分と回るのが早いらしい。びちゃびちゃと舐める舌が忙しく動く。ときおり、じゅっつと強く吸われるものだから、コレは痕になるな、とディルツクは思っていた。この誤のなつてない悪魔に、服を着ても見えてしまうところに嚙血痕を残すなど注意しなければ。

牙の効力はディルツクに変化をもたらしていた。噛みつく相手に強い痛みを与えてしまわないうよう、麻酔というよりも媚薬とでも言うべき成分が牙の先端から分泌されるらしい。

ちらりと己の下半身を見れば、そこはずでに勃ち上がり、再びガイアを求めかのようにいだらだと先走りを満らせていた。

ああ、彼はほんとうに人を惑わす。

どれほどの時間、ガイアは吸血行為を続けていたのだろうか。ようやく、名残惜し気に首から口を放したガイアはそこをチロチロと労わらかのように舐めた。あるはずの刺し傷はとうに消え去り、残ったのは白い肌に淡く咲いた嚙血痕と妖艶な空気ののみ。

「満足したか？」

そう問いかけてやれば、ガイアは唐突に頭をディルツクの胸にあてた。黒い角は出た状態のままなのに、胸元で頭をグリグリとする。まるで幼子が駄々をこねているようだった。その甘えるかのような、訴えかけるかのような動作に思わず笑いが漏れる。

「ふふっ。ガイア、痛いよ」

ディルツクはやんわりと止めようとした。「俺だけ食事、した……お前も俺の血、欲しいよな……うう〜」

なのに、なんとも言えない声をあげるものだから、もういいか、と好きにさせてやる。

「それ、満足したらもう一度、今度は僕の食事に付き合ってもらうからね」



# あとがき

はじめまして!てみおじさんと申します。

拙作を手にとり取ってくださって、またここまで読んでくださって本当に

ありがとうございました!!

途中で一度原稿のデータが全て吹っ飛びーからやり直しになったり、  
卒論やらなんやらに追われたりして死にかけながらも、なんとか人生初の

同人誌を完成させることができました!

寄稿してくれた2名と作業監視してくれたワー達みんなにこの場を

借りてマジで感謝!!!!!!!

この本を読んでくださったテレビの前のあなたにもマジで感謝!!!!!!!!!!!!!!

tntnついてないガイアの作品がもっと見てえんだよ俺はよ…の

気持ちで無理やり描き上げた本ですので、この本をきっかけに

カントのガイアが一件でも生産されればこんなに嬉しいことはない!

よろしくおねだり申し上げます!!!!!!!!!!!!(500000000000dB)

これからもtntnついてないガイアを推していきます!!!!!!!

次があるかは分かりませんが、またどこかで見かけた際にはどうぞ

よろしくお願いたします!!!!!!!!!!!!!!

## おなかいっぱい、きみがほしい!

2021年12月25日 発行

著者 てみおじさん

発行 地形破壊ゼミナール

PixivID : 6321721

TwitterID : Temi1330

Mail : temioji0@gmail.com

印刷 丸正インキ様

ご意見・感想は  
マッシュマロへ↓



この冊子は個人発行の二次創作同人誌で、公式とは一切関係ありません。  
転載・複製・SNS上への無断掲載・ネットオークション・フリマアプリへの出品を禁止します。

GENSHIN IMPACT  
Diluc\*Kaeya  
Unofficial Fanbook



おなかいっぱい、  
きみがほしい!